

デッチあげ 千葉地本青年部長・永島 4名が 材刃販売員

「動労千葉地本」は、千葉鉄当局の「余剰人員対策」と称する「キオスク」販売員募集に応え「千葉地本青年部長・永島某」を先頭に4名を送り出した。当局の「過員」攻撃に手を貸し、動労千葉、国労破壊を狙う動労「本部」革マルの策動を見抜くとともに、裏切り者の追放・一掃にむけ闘いぬくものである。

「60・3」以降の「過員対策」攻撃の突破口
千葉局は一月、「直营店舗の設置及び物品販売について」なる提案を行った。「余剰人員対策」と称する提案のなみは、「キオスク」三店舗（千葉駅二店・四月一日実施、西千葉一店・三月一日実施）の職員による物品販売である。合理化を強行し、大量の「過員」を生み出しておきながら、「過員対策」などと称して労働者を当局の都合のいいように使おうなどというやり方を断じて認めることはできない。

「千葉地本青年部長・永島」を先頭に率先協力
ところが「動労千葉地本」は、「職場と仕事を守るため」「国鉄を国鉄として残すため」と称し、率先してこれに応えたのだ。なんと、現役の「千葉地本青年部長・永島某」他三名の青年部員（佐倉）を「キオスク」に応募させ決定したのだ。

われわれは、動労「本部」革マルが「三本柱」の裏切り妥結を行った時点で、当局になり代わり労働組合が首切りを推進するものと弾劾した。すなわち、「三本柱」の有効な活用が図られることを前提として雇用安定協約が維持される」との協定を結んだ以上、労働組合が責任をもつて出向・休職の実効をあげなければならぬからだ。

動労「本部」革マルは「三本柱」に歯止めをかけた「など」と、あたかも「三本柱」を阻止したかのように吹聴していたものの、なしくずし的に論調を変え、現在では「雇用安定協約を守るために三本柱の実効をあげよう」運動を「国鉄を国鉄として残す闘い（動力車新聞新年号見出し）」だと称

当局の過員攻撃に率先協力し、出向・首切り・労組破壊の先兵と化した 動労本部革マル

「動労千葉地本」は、千葉鉄当局の「余剰人員対策」と称する「キオスク」販売員募集に応え「千葉地本青年部長・永島某」を先頭に4名を送り出した。当局の「過員」攻撃に手を貸し、動労千葉、国労破壊を狙う動労「本部」革マルの策動を見抜くとともに、裏切り者の追放・一掃にむけ闘いぬくものである。

反労働者の裏切り行為を許すな
動労「本部」の路線はきわめて反労働者の裏切り行為である。

第一に、当局の10/15万人首切りにむけた手段を選ばぬ攻撃に手を貸し、労働組合の名をもって労働者を職場から追い出すものである。

第二に、自らは率先して「三本柱」に協力したうえで、「三本柱」を拒否し「雇用安定協約」を破棄される動労千葉、国労所属組合員の「指名解雇」を当局に要請していることである。

第三に、動労「本部」革マルは合理化に協力し国鉄業務を次々と民間委託したうえで、今度は民託会社に出向し、そこで働く労働者を放り出そうという二重の裏切りを犯しているのだ。

考えてもみよ。
「国鉄職員としての身分保障、もとの職場、職種への復帰を約束させた」といつても、五/六年後に現在の職場があるという保障がどこにあるのか。「60・3」ですさまじい労働強化の交番をつくり、千葉局だけで年間一億五千万円の超勤を支払いながら、一方で「過員」を「キオスク」へ行かせるなどという、デタラメな施策を平然と行う当局に怒りを燃やし、これと対決し闘って職場を守る以外に労働者の生きる道はないのである。

われわれは、闘わないことよって起こる困難よりも、闘うことよって起こる困難を選ぶものである。それが「60・3」の闘いである。「動労千葉地本」解体・一掃にむけ闘おう。

△訂正とおわび▽
『日刊』家庭版（2月3日付）駅伝大会成績表の中「第2位 新小岩Aチーム 第5区間走者 並木敬治さんのタイム」に誤りがありました。正しくは「11分42秒」です。訂正しておわびいたします。